

# 母性看護学実習におけるオンラインインタビューによる学習効果

馬場真紀<sup>\*1</sup>

**要旨**：本研究の目的は、学内実習における妊婦、褥婦に対するオンラインインタビューによる学生の学びの内容から、その学習効果を明らかにすることである。対象理解に繋げるために岡山県 A 専門学校（以下、A 校）の学内実習において妊婦、褥婦に対するオンラインインタビューを行った。その体験を振り返り、学んだ内容についてグループインタビューを行った。その結果、46 コード、15 サブカテゴリー、7 カテゴリーが抽出された。学生は、オンラインインタビューにより、【知識の確認】【想像していたことと実際の比較】【イメージの変化】【対象者と関わりたい思い】【ウェルネスの視点での看護】【母親との人間関係】【個々の生活に応じた視点】についての学習効果が得られた。

**キーワード**：母性看護学実習，オンラインインタビュー，イメージ

## はじめに

母性看護学実習は、近年の学校養成所の増加や少子化の進展に伴い、看護学実習の中でも特に実習施設の確保が困難な状況にある。更に、2020 年より新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の蔓延に伴い、妊婦や新生児と接する機会が多い母性看護学実習における臨地実習は、全国的に困難な状況となっている。

日本看護学校協議会共済会のアンケート調査<sup>1)</sup>によると、看護職養成校の 96.6%が新型コロナウイルス感染症拡大の影響により臨地実習の受け入れ不可を経験している。そのため、各校で臨地実習の代替として紙上事例、視聴覚教材、教員や模擬患者と学生によるロールプレイ、シミュレーター・モデルの使用、オンラインライブによる非対面（遠隔・リモート）方式などによる工夫が行われ、臨地実習に替わり学修を担保できるよう対応を行っている。また、72.2%の養成校が看護教育の情報通信技術（ICT）化を進めたと回答しており、今後さらに看護教育における ICT を活用した工夫が必要になると考えられる。

一般社団法人日本看護系大学協議会による 2020 年度 COVID-19 に伴う看護学実習への影響調査結果<sup>2)</sup>によると、学内実習への変更を余儀なくされた大学は、全体の 80.1%であり、専門領域別では母性看護学の 86.0%が最も割合が高かった。また、遠隔授業形式による実習への変更を全体の 64.2%が行っており、専門領域別には母性看護学の 70.1%が最も割合が高く、そのうちオンライン（ライブ配信、双方向型）による患者（対象者）の招聘を行ったのは 7.5%であった。このように、コロナ禍の影響により全国的に代替実習の方法を模索しながら実習を進めており、シミュレーション教育を活用した研究報告や、ICT を活用した母性看護学実習のプログラム開発などの研究が見られ始めている。しかし、そのような教育の試みはまだ始まったばかりの状況であり、代替実習を余儀なくされた中で ICT を活用した教育方法の研究は発展していくと考えられる。

---

\*1 玉野総合医療専門学校 保健看護学科

出生率が低下している現代社会において母子と関わる機会は非常に少なく、母性看護学の対象者をイメージすることに困難さを感じる看護学生は多い。また、本校は附属病院を持たず、対象となる母子と接する機会が少ない中での実習を行っており、更に新型コロナウイルス感染症の影響により今まで以上に臨地実習ができず、対象者のイメージ化に繋げることが困難な状況となった。そこで、母性看護学実習における対象者のイメージ化を図る教育方法の検討が必要であると考え、妊婦と褥婦へのオンラインインタビューを行った。インタビュー後の学生の反応から、教科書や演習だけでは学べない母親としての思いを感じ取り、イメージしていたことと現実とのギャップがあったという意見が多く、学びの内容を明らかにすることでオンラインインタビューによる学習効果を明確にし、今後の母性看護学実習における対象者のイメージ化に繋がりたいと考えた。

## 研究方法

### 1. 研究期間

2021年6月～12月

### 2. 対象

A校保健看護学科3年生。学内実習においてオンラインによるインタビューを行った学生のうち、研究協力の同意が得られた学生6名。

### 3. データ収集方法

半構造化インタビューによるグループ面接とし、所要時間は30分程度で行った。インタビュー内容は、5月にLINEのビデオ通話を使用し（対象者の希望によりLINE電話を使用）、妊婦（36週）と褥婦（2か月）に対しオンラインによるインタビューを行った場面を振り返ってもらい、①インタビューを通して学んだことは何か、②インタビュー前後で変化したことは何か、③オンラインによる画面越しでの情報収集についてどう感じたかについて、研究依頼文書に記載したものを事前に渡し、質問を行った。また、インタビュー中には語られた内容を深く理解するための質問を適宜加えた。面接日は、学生に負担の少ない実習終了後の7月に実施した。面接内容は承諾を得てICレコーダーに録音し、逐語録におこした。

### 4. 分析方法

面接内容はデータを逐語録に起こし、研究目的に沿って文脈を抽出し、コード化した。その後、意味内容に留意しながら意味のまとまりで分類し、抽象化したサブカテゴリー名をつけ、それらを比較検討し、共通性を持つものをまとめてさらに抽象化したカテゴリー名を抽出した。なお、分析結果の厳密性を確保するために、質的研究に精通した看護教員1名からデータとカテゴリー生成結果について、スーパーバイズを受け信頼性の確保に努めた。

## 5. 倫理的配慮

本研究への参加は自由意志であり、参加しない場合でも成績には関与せず不利益を受けないこと、参加後いつでも撤回でき、その場合にも不利益を受けないことを保障すること、また、個人情報対象者が特定されることはないこと、厳重に保護することを口頭及び説明文により説明し、書面にて研究参加の同意を得た。データは、個人が特定できないように匿名化した上でコード化し、データ処理を行った。また、データはID設定済みのUSBに保存し、得られたデータの電子媒体及び紙媒体は、研究責任者の責任のもと施錠されたキャビネットに保管し、研究終了後、紙媒体の資料は溶解処理し連結不可能匿名化とした。

本研究は、玉野総合医療専門学校の承認（研究計画番号：2021002）を得て実施した。

## 結果

### 1. 対象者の属性

男子学生1名と女子5名であり、全員が20代の未婚で妊娠歴はなく育児経験はない。

### 2. インタビューを通しての学生の学び（表1）

学生のインタビューによる発言を分析した結果、46コード、15サブカテゴリー、7カテゴリーが抽出された。7つのカテゴリーの内容は、【知識の確認】【想像していたことと実際の比較】【イメージの変化】【対象者と関わりたい思い】【ウェルネスの視点での看護】【母親との人間関係】【個々の生活に応じた視点】であった。なお、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを [ ], コードを「 」で表す。

【知識の確認】は、[自分の知識][自分の体験]の2サブカテゴリーから構成されていた。[自分の知識]は、「教科書にはこの範囲じゃないとダメ」「ネットとかで実習前に調べた」という教科書を中心とした知識とインターネット等による情報収集による自分の知識の範囲を振り返っており、「自分の身近に妊婦さんとかあんまりいない」、「妊娠とかについて考えるきっかけは授業とか実習以外ではなかった」と、それまでの自分の経験や学内演習での妊婦体験等の[自分の体験]との比較により、自己の【知識の確認】を行っていた。

【想像していたことと実際の比較】は、[想像][実際]の2サブカテゴリーから構成され、インタビュー前に「大変だろうな」「しんどいだろうな」というネガティブな[想像]をしており、インタビューを通して、「ご飯が意外と食べれる」「最低限の安全確保でよい」「きっちりさせずに曖昧」「大雑把」「最悪の範囲さえ守っていたら良い」と考えている母親の現状や「表情とかお腹の大きさ」を見ての印象、「実際はこうなんだという母親の考え」を聞くことで[実際]を知ることができ、[想像]と[実際]の比較が行われていた。

【イメージの変化】は、[イメージと現実のズレ][ネガティブからポジティブへのイメージの変化]の2サブカテゴリーから構成され、「そこまでしんどいというイメージを持たれていないのが意外」「自分が思ったような苦痛ではない」「教科書通りの経過という思い込みがあった」「教科書に当てはめようとしてしまったが当てはまらないことがある」など、[イメージと現実のズレ]を感じているようであった。また、「ポジティブ」「ネガティブ発言（辛い、動きづらいなど）がない」「大変なことはないと捉えている」「嬉しいと感じている」「楽しいと感じている」「明るい」「育児に慣れている」「ずっと笑顔」「子どもへ

表1 オンラインインタビューによる学生の学び

カテゴリー(7)	サブカテゴリー(15)	コード(46)
知識の確認	自分の知識	教科書にはこの範囲じゃないとダメ ネットとかで実習前に調べた
	自分の体験	妊婦体験 自分の身近に妊婦さんとかあんまりいない 妊娠とかについて考えるきっかけは授業とか実習以外ではなかった
想像していたことと実際の比較	想像	大変だろうな しんどいだろうな
	実際	ご飯が意外と食べれる 最低限の安全確保でよい きっちりさせずに曖昧 大雑把 最悪の範囲さえ守っていたら良い 表情とかお腹の大きさ 実際はこうなんだという母親の考え
イメージの変化	イメージと現実のズレ	そこまでしんどいというイメージを持たれていないのが意外 自分が思ったような苦痛ではない 教科書通りの経過という思い込みがあった 教科書に当てはめようとしてしまったが当てはまらないことがある
	ネガティブからポジティブへのイメージの変化	ポジティブ ネガティブ発言(辛い、動きづらいなど)がない 大変なことはないと捉えている 嬉しいと感じている 楽しいと感じている 明るい 育児に慣れている ずっと笑顔 子どもへの愛情が大きい
対象者と関わりたい思い	対象者に近づきたい思い	触りたい 関わりたい 愛でたい 父親の声を聞きたい
	赤ちゃんとの関わりから抱いた感情	赤ちゃんが可愛い 初めて赤ちゃんを見た 可愛いという感情を強く抱いた
ウェルネスの視点での看護	対象者との関わりの実感	やっぱり(妊婦)体験では感じ取れないことだな
	ウェルネスの捉え方	健康な人を対象にした関わり方が分かった
母親との人間関係	一緒に学ぶ姿勢	一緒に学習していくような関わり 指導の仕方
	妊娠期からの継続した支援の重要性	妊娠から産褥までの関わりが大事 一貫性が大事
個々の生活に応じた視点	緊張感がある	緊張感がある
	個別性がある	言葉選びが必要 人間関係を築いていくことを意識する 顔も性格も分からない
	母親それぞれの生活がある	その人なりの子育てがある どうやって生活の中で生かしていくか考える必要がある

の愛情が大きい」など、インタビュー前にイメージしていたネガティブではなく、母親自身はポジティブに捉えていると感じており、〔ネガティブからポジティブへのイメージの変化〕が最も多い9コードであった。

【対象者と関わりたい思い】は、〔対象者に近づきたい思い〕〔赤ちゃんとの関わりから抱いた感情〕〔対象者との関わりの実感〕の3つのサブカテゴリーから構成されていた。実在する対象者との関わりを通して、「触りたい」「関わりたい」「愛でたい」という〔対象者に近づきたい思い〕が強くなり、今回のインタビューでは関わることの出来なかった「父親の声を聞きたい」という思いにも発展したようであった。また、「赤ちゃんが可愛い」「初めて赤ちゃんを見た」「可愛いという感情を強く抱いた」と画面越しではあるが、〔赤ちゃんとの関わりから抱いた感情〕が強く揺さぶられたようであった。また、「やっぱり(妊婦)体験では感じ取れないことだな」という〔対象者との関わりの実感〕を感じており、画面を通しての双方向コミュニケーションにより、さらに継続して【対象者と関わりたい思い】

を強く感じたようであった。

【ウェルネスの視点での看護】は、〔ウェルネスの捉え方〕〔一緒に学ぶ姿勢〕〔妊娠期からの継続した支援の重要性〕の3サブカテゴリーから構成され、「健康な人を対象にした関わり方が分かった」という〔ウェルネスの捉え方〕や、「一緒に学習していくような関わり」「指導の仕方」という〔一緒に学ぶ姿勢〕が必要であること、「妊娠から産褥までの関わりが大事」「一貫性が大事」などの、〔妊娠期からの継続した支援の重要性〕に気づき、ウェルネスの看護の関わり方についての理解に繋がったようであった。

【母親との人間関係】は、「緊張感がある」「言葉選びが必要」「人間関係を築いていくことを意識する」「顔も性格も分からない」など、画面を通してのコミュニケーションであったが、〔妊婦、褥婦と初めての対面〕により、緊張感を持って人間関係を意識した対応を行っていたことが分かった。

【個々の生活に応じた視点】は、〔個別性がある〕〔母親それぞれの生活がある〕の2サブカテゴリーから構成され、「その人なりの子育てがある」ことに気づき、〔個別性がある〕事と、「どうやって生活の中で生かしていくか考える必要がある」という〔母親それぞれの生活がある〕ことについて、【個々の生活に応じた視点】を持つ必要性に気づくことができたようであった。

## 考察

本研究は、母性看護学実習の学内実習において、オンラインインタビューによる学びの内容から、学習効果についての示唆を得た。

学生は、オンラインインタビューにおいて自分の今までの経験や体験、学んできたことの【知識の確認】を行っており、対象者の語っていることの意味づけをしようとしていた。Kolb<sup>3)</sup>は、「学習とは、経験の変換によって知識が形成される過程である」としている。また、経験学習モデルを<具体的経験><省察><概念化><試行>の4つのステージから構成される<sup>4)</sup>としている。学生は、知識を受動的に覚えるのではなく、自らの経験を通して、それまでの自己の知識を振り返り知識の概念化に繋げていくことができたと考える。

### 1. 対象者のイメージ化

学生は、机上の学習により自分の思い描いた妊婦や褥婦像があり、【想像していたことと実際の比較】を行っていた。講義の中でもウェルネスに視点を置いた授業を行っており、学生の発言からもウェルネスの視点が大切であるという発言は度々みられていた。しかし、今回のインタビューを通して、母親を問題志向で捉えようとしていたことが明らかとなった。学生は、母性イコールウェルネスと考えつつも、ネガティブな発言を探そうとしていたが、母親の生の声を聞くことで、改めて嬉しい、楽しいというポジティブな【イメージの変化】に繋がったと考えられる。

学生は、ほとんどの実習において、問題点に着目する問題志向型の思考を繰り返しており、ウェルネスの視点に転換することは容易ではないと考えられる。しかし、母親との関わりを通して、問題志向型における正常範囲の捉え方とは違い、曖昧さや大まかさなども

看護する上で必要であり、健康レベルが高い母親への介入として、一方的ではなく〔一緒に学ぶ姿勢〕が必要であり、今回の対象者を妊婦及び褥婦としたことにより、妊娠期から継続した支援が必要であることなど【ウェルネスの視点での看護】の理解に繋がったと考えられる。

「イメージ」とは、「心の中に思い浮かべる像、全体的な印象、心象」のことである。コロナ禍において対面できない母親と赤ちゃんに対するイメージを、如何にして「心の中に思い浮かべる像」と実際に結び付けるのか、教員は、学生のイメージ化を図るために様々な方法を工夫するが、限界がある。しかし、臨地実習と同様に、言葉だけではなく、母親の表情や児との関わりの実際を見ることで、母親の愛情や赤ちゃんが愛おしい存在であることを感じ取ることに繋がったのだと考える。また、愛情を感じ取るということは、机上の学習では不可能な学習内容であり、臨地実習ではなくオンラインインタビューにおいても、それを学ぶことが可能であることが明らかとなった。

## 2. オンラインインタビューによる学習意義

今井ら<sup>5)</sup>は、シミュレーターを用いたシミュレーション教育の課題として、「シミュレーターは技術の獲得においては効果的であるが、コミュニケーション能力を伸ばすには限界があり、シミュレーターは模擬患者のように対峙する対象が人ではなく、人形であるがゆえ、対象への配慮といった能力獲得には不向きであると考えられる」と述べている。今回のオンラインインタビューでは、実際に対象者とのコミュニケーションをとることが可能であり、学生の発言からも【母親との人間関係】を意識したコミュニケーションが可能であった。これは、対象者が模擬患者ではなく初めて対面する母親と児であったことが意義深かったと考える。初対面の対象者とのコミュニケーションは、学生にとっては非常に緊張感があり、人間関係を構築する過程は臨地実習と同様の体験になったと考えられる。また、画面を通じて対象者の背景に家庭での生活の様子や母と児の関わりの様子など、視覚を通して把握することができ、【個々の生活に応じた視点】をもつことに繋がったと考える。生活の場を実際に見ることは、臨地実習においても出来ないことであり、オンラインであったからこそ学べた効果であったと考える。また、実際の母親と児との関わりにより、現実的な対象者として捉え、更に【対象者と関わりたい思い】が深まり、学生の看護に対する思いを持つことが出来た。学習意欲とは、自発的・能動的に学習しようとする欲求・意志のことであり、「学習意欲は心理学における「学習への動機づけ」とほぼ同義語である」<sup>6)</sup>ともいわれている。学生が対象者と関わりたい思いは学ぶことへの意欲であり、学習への動機づけになると考えられる。

オンラインインタビューなど ICT を活用する上で、学生が主体的に取り組める授業設計となるような、実習プログラムを開発する必要があると考える。

## 結論

学内実習における妊婦、褥婦に対するオンラインインタビューによる学生の学びの内容から、学習効果を明らかにすることを目的に、質的研究を行い、以下の結果が明らかとなった。

1. 学生は、自分の今までの経験や体験、学んできたことの【知識の確認】を行っており、対象者の語っていることの意味づけをしようとしていた。
2. 学生は、机上の学習により自分の思い描いた妊婦や褥婦像があり、【想像していたことと実際の比較】を行っていた。
3. 学生は、ネガティブな発言を探そうとするが、画面を通じて母親の表情や児との関わりを見ることで、愛情を感じ取ることができ、ポジティブな【イメージの変化】に繋がった。
4. 学生は、母親との関わりを通して、〔ウェルネスの捉え方〕〔一緒に学ぶ姿勢〕〔妊娠期からの継続した支援の重要性〕に気づき、【ウェルネスの視点での看護】の理解に繋がっていた。
5. 学生は、〔妊婦、褥婦と初めての対面〕により、緊張感を持って【母親との人間関係】を意識したコミュニケーションを行っていた。
6. 学生は、画面を通じて家庭での生活の様子を知ることができ、【個々の生活に応じた視点】をもつことに繋がった。
7. 学生は、実際の母親と児との関わりにより、現実的な対象者と捉えることができ、【対象者と関わりたい思い】を持ち、学習意欲に繋がった。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様と実習にご協力くださいました妊婦、褥婦の方に心より感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 一般社団法人日本看護学校協議会共済会：新型コロナの影響 看護学校でも深刻。一般社団法人日本看護学校協議会共済会ホームページ, (オンライン), <https://e-kango.net/>, (参照 2021-06-15-13:14)
- 2) 一般社団法人日本看護系大学協議会：2020年度 COVID-19に伴う看護学実習への影響調査。一般社団法人日本看護系大学協議会ホームページ, (オンライン), <https://www.janpu.or.jp/virus-info/>, (参照 2021-05-28-14:06)
- 3) Kolb, DA : Experiential learning theory and the Learning Style Inventory. A reply to Freedman and Stumpf. *Academy of Management Review* 6: 289-296, 1981
- 4) Kolb, DA : Experiential learning. Experience as the Source of Learning and Development. New Jersey, Prentice Hall, 21. 1984.
- 5) 今井秀人, 中山由美他：看護学生を対象としたシミュレーターを用いたシミュレーション教育の学習効果, 課題に関する国内文献レビュー. 摂南大学看護研究紀要 8 : 46-54, 2020
- 6) 杉森みど里, 舟島なをみ：看護教育学（東京：医学書院, 2018）211